

2016年2月14日川越教会

すべての民と共に

加藤 享

【聖書】ローマの信徒への手紙 15章7～13節

だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。 わたしは言う。キリストは神の真実を現すために、割礼ある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり、異邦人が神をその憐れみのゆえにたたえるようになるためです。

「そのため、わたしは異邦人の中であなたをたたえ、あなたの名をほめ歌おう」

と書いてあるとおりです。 また、

「異邦人よ、主の民と共に喜べ」と言われ、更に、

「すべての異邦人よ、主をたたえよ。すべての民は主を賛美せよ」

とされています。 また、イザヤはこう言っています。

「エッサイの根から芽が現れ、異邦人を治めるために立ち上がる。異邦人は彼に望みをかける。」

希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満らし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるよう。

【序】川越教会の新しい聖句と幻

川越教会の新しい歩みについて、14年度から**教会修養会**を5回開催して話合ってきました。一年前の3月8日には、次代への聖句として、2007年1月に、私が臨時牧師就任第一回の礼拝で掲げた聖句「**見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び**」（詩編 131：1）と共に、**新しい聖句**を決めました。

「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満らし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるよう。」

（ローマ 15：13）です。そして礼拝堂正面の左右に掲げられたこの二つの聖句を見ながら、私たちは毎日曜ごとに礼拝を守って来て居ます。9年前の聖句については、その時の説教原稿をプリントして、後のテーブルに置いておきましたので、ご覧頂いていると思います。

そこで今朝は、昨年決めた聖句を掛け軸に書いてくださった小山兄がスチュワードシップ月間の証をされるので、私もこの聖句からメッセージをお取次ぎすることにします。ちなみに、この聖句を決めた時の教会修養会で語り合った

川越教会の幻を記してみましよう。

- 1、**賛美に溢れる教会**：小松澤恵姉（大久保教会音楽主事）を月1回招く。
- 2、**近隣の方々との関わり**：地域の行事に参加する・バザー等で近隣との交わりを進める・幼小科のお母さん方を招く・花壇を整備しオープンガーデンを目指す。
- 3、**証しし合える教会**：隔月程度のペースで「喫茶とフリートーク」の場を設け互いに自由に話し合えるようにする。
- 4、**当番信徒・奉仕者の役割、奉仕者の心得**（受付・献金・主の晩餐式・司式）を再確認する。執事制復帰は現状を見極めつつ16年度実施を目途に準備していく。
- 5、**家庭での祈りを大切に**し、家庭集会を考える。
- 6、**プレハブ**（火災後の臨時会堂）：チロリン村・バザー・体操教室等で活用しており、補修の可否等を検討する。
- 7、**駅の近隣への移転**が将来的には必要。（駐車場の確保も含めて）

[1] ユダヤ人と異邦人の一致

さて**ローマの信徒への手紙**は、世界伝道の第一人者**パウロ**が、第三次伝道旅行中の紀元56年頃に、ギリシャのコリントからローマ帝国の都ローマの教会に宛てて書き送ったものです。イエス・キリストの十字架と復活によってもたらされた救い・**福音の真髄**をしっかりと説き明かした**中心的な手紙**です。

私たちが選んだ聖句15章13節に注目しましょう。パウロはローマ教会に対して、「**希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とで、あなたがたを満たし、希望に満ちあふれさせてくださるように**」という祈りを述べています。信仰によって得られる**喜びと平和**とは、どういうものなのでしょう。

7節から13節までの段落には、「**福音はユダヤ人と異邦人のためにある**」というタイトルが付けられています。そして**9節**にはダビデの歌、**10節**はモーセの歌、**11節**は詩編、**12節**は預言者イザヤの言葉が引用されています。これらは皆、すべての**異邦人**も主の民**ユダヤ人**と共に、主なる神をたたえよ、すべての民は主を賛美せよ、という**旧約聖書からの引用**です。

ユダヤ人は**自分たちだけが主なる神の民**であり、割礼を受けていない民を**異邦人**、別人種として**排除**していました。しかし彼らが信じている律法・歴史・文学・預言の書、すなわち**旧約聖書**には、このように、異邦人に対して**共に主**

なる神をほめたたえようという呼びかけが記されているのではないかとパウロは主張したのです。特に預言者イザヤは、「エッサイの子孫から、異邦人にも恵みの支配が及ぶ**メシア**が現れる。異邦人はそのメシアに望みをかけている」との神の預言を語っているのではないかとパウロは述べているのです。

1 節から 6 節までの段落では、**強い者が強くない者の弱さを担い**、隣人を喜ばせ、互いに向上していく生き方が勧められています。**キリスト**は神の子でありながら、弱い者、貧しい者を助け、弟子たちの足を洗い、ご自分の命を投げ出して、すべての者の**罪を贖う死**を遂げて下さいました。それ故に神は、キリストを死より復活させて、死と滅びに打ち勝つ**愛の勝利**を現されました。このキリストを救い主と信じる時に、強い者と弱い者が共に仲良く生きていく**喜びと平和**が生まれるのです。

そして 7 節以下では、皆が救い主の恵みを声を合わせてほめたたえる時に、**互いに相手を受け入れあって**、神の民だ・異邦人だという人種差別の争いからの救いがもたらされて、世界の全ての民が声を合わせて主を賛美する**喜びと平和**に満たされるという、希望の源である神の恵への**感謝と祈り**で、パウロは 1 章から書き始めて来た信仰の勧めを閉じたのでした。

[2] ヘイトスピーチ

私は 1995 年から約 10 年間、日本バプテスト連盟からの**派遣宣教師**として、**シンガポール**で暮しました。シンガポールで暮す日本人のために「国際日本語教会」を作って、日本語と英語の二ヶ国語で説教をしましたので、国際結婚組やシンガポール人も集まって来ました。人種が違っても**仲良く交わり**、支え合いました。

タクシーに乗ると、運転手から「**朝鮮人か?**」とよく聞かれました。「矢張り自分には朝鮮系の血が混じっているのだなー」と変に納得して、韓国人に対して、親近感すら抱くようになりました。ところが**昨年 9 月**にシンガポールに行った時のことです。「**コレアン?**」と聞かれて「ノー、**ジャパニーズ**」と答えると、「ご免なさい。日本人?と先に聞いて、実は韓国人だと、ものすごく怒られるので、先ず韓国人?と聞くことにしているのです」と教えてくれました。

矢張り韓国の人たちには、日本人に対する強い**対抗意識**があるようです。20 年経って、初めて気付かされました。何とボンヤリしてきたことでしょうか。人種・国籍が違っていると、無意識のうちにも、食い違う色々な心情が発生するもの

なのですね。韓国では、よく反日感情が燃え上がり、「**小日本**」（英語のジャップに相当する語だそうです）と叫ぶデモが起こります。日本でも**ヘイトスピーチ**が日常的に繰り返されていると言われます。新大久保では「**在日朝鮮人ぶち殺せー!**」というヘイトスピーチが繰り返されているそうですね。

「ヘイトスピーチという**他人を傷つける表現**が、日常として当たり前になってしまう社会、**敵意をむき出しにする**ような社会が出来てしまうと、大変な問題だと恐れを覚える」と或る専門家が語っていました。私は、今回聖書のこの箇所を繰り返し読んでいて、自分たち以外の民族を異邦人として差別し、交わりを拒否してしまう**ユダヤ人の宗教意識**の恐ろしさを、あらためて自覚させられました。

だからこそパウロは、福音信仰の真髓を語った最後の締めくくりとして、旧約聖書の各部分から、主の民と異邦人が**共に主なる神を賛美する言葉**を取り出してきて、**信仰の喜び、平和、希望**に満ち溢れますようにという祈りを記したのですね。私たちは、この祈りを繰り返し祈りつつ、**信仰の歩み**を続けていかなければなりません。

【3】世界宣教者パウロ

この手紙の終わり部分の 16 章 22 節に「この手紙を**筆記**したわたし**テルティオ**が、キリストに結ばれている者として、あなたがたに挨拶します」と記されています。コリントⅡの 12 章では、パウロが**持病に苦しんでいる自分**を告白していますから、ローマの教会に宛てた手紙を書く時も、体調がすぐれず、テルティオの助けを借りて**口述筆記**したのでしょうか。それでも、パウロはこの手紙の 15 章 22 節以下で、**エルサレム**へ行ってから、**ローマ**を訪れ、更に**イスパニア**に行きたいと、述べています。

一方、使徒言行録 20 章によりますと、パウロはコリントに滞在してローマへの手紙を書いた後で、エルサレムに行こうとして、ミレトスの港で**エフェソ教会の長老たち**と会い、**別れの挨拶**をしています。「今、わたしは、“**霊**”に促されてエルサレムに行きます。——**投獄と苦難**とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でも はっきり告げてくださっています。——しかし**神の恵みの福音を力強く証しする**という任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。そして今、あなたがたが皆、もう二度とわたしの顔を見ることがないと、わたしには分かっています。」と語っています。長老たちは皆泣いて別れを惜しみました。

このようなパウロの言動を見ますと、彼が**世界宣教**に召されたという**召命感に徹していた姿**を、私たちは目の当たりにする思いがします。エルサレムの貧しい信者たちを助けるために、ギリシャ地方の諸教会に訴えて献げられた募金を、どんなに危険が待ち受けていようとも、ユダヤ人教会と異邦人教会の間に**主にある一致を造り上げていくために**、自分自身で届けてようとするパウロ。

しかもそこで終わらずに、更に**病弱な身体をおして**、ローマ教会そして世界の果てと言われるイスパニアにまで、**福音を届けよう**と祈り続けているのです。世界の全ての人に主の素晴らしい福音を伝えるという使命感に徹しているのです。何と素晴らしい信仰でしょうか。

【結】川越教会の祈り

神は全世界の創造者です。世界のすべての生きとし生ける者を愛しておられます。そして永遠の命に与らせようとして、**救い主イエス・キリスト**をこの世に誕生させられました。貧しい家畜小屋での誕生でしたから、野宿して羊を守っていた**貧しい羊飼いたち**が、真先に誕生を祝いに来ることができました。それと同時に、**遠い東の国の占星術の学者たち**も、黄金・乳香・没薬等の高価な捧げ物を携えて、星に導かれつつ訪ねて来て、拝することができました。このように救い主は、身近な**貧しい者**の救い主であると同時に、遠い国々の**豊かな人達**の救い主でもあるのです。福音は世界中の**全ての人に**伝えられなければならないのです。

私たち川越教会も、救いを必要としている身近な人々への伝道とともに、**世界宣教**にも、働き人を送り出していかなければなりません。聖霊の力によって、私たちが**希望に満ちあふれさせてくださるよう**に、祈って参りましょう。

祈ります：神さま、強い者と弱い者とが互いに喜び支え合って生きていく川越教会にしてください。自分と違う者と共にあなたを賛美する、喜びと平和に満ちた教会にしてください。海外に出て行って、違う国の人たちと共に暮らしながら、福音の喜びを証しする働き人を、祈り送り出していく教会にしてください。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン